平成 14 年度　8020 公募研究報告書抄録

報告書名：各ライフステージにおける歯の本数と自覚的健康度および QOL との関係
（阿蘇地域歯科保健計画策定に伴うアンケート調査のまとめ）

研究者名：片山公則、田代正博、市原誓志、田上大輔、佐藤俊一郎、甲斐義久
所　　属：熊本県歯科医師会阿蘇支部阿蘇郡歯科医師会

阿蘇地域歯科保健連絡協議会が阿蘇地域歯科保健計画策定を目的に行ったアンケート調査をもとに、青壮年期、高齢期の各ライフステージにおける歯の本数と自覚的健康度、QOL および歯科保健行動との関わりについて検証した。

アンケート調査の回答数は青壮年期 761 名、高齢期 468 名であった。調査期間は平成 13 年 3 月 6 日から平成 13 年 3 月 31 日、調査項目は国の平成 11 年度保健福祉動向調査（歯科保健）を参考に作成した。「歯の本数」と「口の中の悩み」、「何でもおいしく食べられるか」、「歯や歯ぐきが原因で困ったこと」、「身体の状態」、「歯や歯ぐきの注意点」、「歯を磨いていますか」、「歯間清掃用具を使用しているか」、「歯科健診の有無」および「楽しみや生きがい（高齢者のみ）」についてクロス集計を行った。

阿蘇郡において、自分の歯を 20 本以上持っている人の割合は、80 歳をのぞき全国の結果より低い数値を示した。「口の中の悩みに」関しては、各世代とも「ある」が 80%を超えていたが、歯の本数との相関関係は認められなかった。特徴的なものとしては、高齢期では義歯関連のもの、青壮年期では歯周病関連のものの割合が高くなっていた。「何でもおいしく食べられるか」は、それほど世代間の差が見られず「はい」が 60〜70%であった。「歯や歯ぐきが原因で困ったこと」に関しては、「ある」が 20〜30%台で、青壮年期では歯の本数の多い人が困ったことがなく、歯の本数の少ない人が困ったことがあると回答している割合が多かった。一方、高齢期では、「歯の本数」と「困ったこと」との間に相関関係が認められなかった。「身体の健康状態」と歯の本数との関係においては、歯の喪失が顕著になる 40 歳代および 50 歳代で強い相関関係を認めた。「歯や歯ぐきの注意点」の個数では、口腔内の健康に関心を持ち、自己管理を継続することが、50 歳以降の歯の喪失に強く影響していることが示唆されたが、その一方、「歯科検診や歯科健康診査」の割合はかなり低かった。「歯科受診」と歯の本数の関係では、歯の本数の多い人は歯科受診の割合が低く、歯の本数の少ない人は歯科受診の割合が高くなっていた。　高齢期における「楽しみや生きがい」と歯の本数との関係では、７０歳代において強い相関関係を認めた。

今回の調査から、若い世代からの定期的な検査や指導の積み重ねが、多くの歯を残すことになり、健康的で生きがいのある生活につながることがうかがえた。我々の責務として健康な歯を多く残すことの意義を知らしめるべく、今回の調査分析の結果を地域住民や関係者にフィードバックし、住民の意識の啓発および住民の行動をサポートするための環境や制度の充実が必要であると思われた。